



俳諧秘傳ちり道集巻之上

^ 5
4654
1



一つし、左風角係のふれこかれく左坂
 未せり全るさふれ存まといくし
 今く世坂を吹るおれし
 宝房九巴のくまうり

芭蕉菴三世後下之長房

其の長



俳諧近道卷之上目録

一	俳諧之大意	二	俳諧字部
三	曰六義六辨六類	四	切字之部
五	下知の切	六	二世の
七	身ぬふのぬ	八	裁るの事
九	やの切字	十	二まおの事
十一	二辰切之辰切	十一	ととくふとく
十三	大包しま妙	十二	まゑの切
十五	扱扱切	十六	中乃切

の上

の上

十七	高切まゝを別句	十八	交るる切まじり
十九	やふ哉	二十	遠く各格
廿一	古風の切ま	廿二	心切ま分
廿三	又ま余りの事	廿四	あるく切まの通記
廿五	雑の交句のみ	廿六	各所依格
廿七	後授ま眼泳格	廿八	一画 讀
廿九	笑吟を得のみ	三十	五音連声相通の交
卅一	起向うま他に有交	卅二	あてゐる新法
卅三	ぞかしく押ま	卅四	下の句てとあ

卅五	下の句ふる	卅六	はくしとあ
卅七	下の句えもる	卅八	あそとらこのあ
卅九	らんのもぬ字	四十	下の句ニヌの句依
四十	下の句何との句依	四十一	いひあとしてにん
四十二	たふさくしんま	四十二	笑このあ
四十三	夏ま、他借 <small>子</small> 千句法	四十三	何とこのま
四十四	あつるは松のみ	四十四	由代ある恋の弁
四十五	四季閑寄略注	四十五	初ん切まの何
四十六	古人切まの合ま	四十六	他借の終り

〇廿七

〇卅三

〇廿七

〇卅三

やい ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

かハ びんびんびんびんびんびんびんびんびんびん 夫也

こそ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん ちんちん

ちり ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 越人

あり びんびんびんびんびんびんびんびんびんびん ちんちん

いふ 此の目もあつたあつたあつたあつたあつた 全

いふ 此の目もあつたあつたあつたあつたあつた 全

いふ 此の目もあつたあつたあつたあつたあつた 全

いふ 此の目もあつたあつたあつたあつたあつた 全

ゆふ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

いふ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

かじ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

イッ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

誰カソ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

いっ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

いっ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

いっ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

いっ ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん 其角

六 ハルカ

○アーサーーサーーサーーサーー

右の歌にさしあはせし^{キイ}ハルカ^{カヨ}の音にまじりてあはせし

○白ーあーあーあーあーあー

白ーあーあーあーあーあー

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

○アーサーーサーーサーーサーー

七

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

白^{シロ}イ^イカ^カキ^キの^ノ音^ネに^ニま^まじ^じり^りて^てあ^あは^はせ^せし^し

ちやうほうのふぢまへ

初ま素えくく人帰るん

○方四のやうきだんて改まがらうらん

今にくらまわし書のみまへ

○方五のやうきだんて改まがらうらん

改てふくちやまぢまにわし改まがらうらん

○方六のやうきだんて改まがらうらん

改てふくちやまぢまにわし改まがらうらん

○方七のやうきだんて改まがらうらん

改てふくちやまぢまにわし改まがらうらん

○方八のやうきだんて改まがらうらん

改てふくちやまぢまにわし改まがらうらん

○方九のやうきだんて改まがらうらん

改てふくちやまぢまにわし改まがらうらん

○方十のやうきだんて改まがらうらん

改てふくちやまぢまにわし改まがらうらん

○方十一のやうきだんて改まがらうらん

改てふくちやまぢまにわし改まがらうらん

○方十二のやうきだんて改まがらうらん

改てふくちやまぢまにわし改まがらうらん

あろろくく^ナ苗代^{シロ}のさ^ナあ^ナつ^ナけ^ナん^ナと^ナ牛^ナふ^ナ纏^ナや
つ^ナお^ナと^ナけ^ナて^ナち^ナめ^ナの^ナり^ナか^ナま^ナま^ナい^ナん^ナあ^ナん

十六 中の切の事

猫^{ネコ}の^コあ^ナじ^ナ時^{トキ}圍^イら^ナぢ^ナら^ナ月^{ツキ} たま

是^{コノ}止^トは^ナい^ナく^ナし^ナつ^ナば^ナと^ナい^ナく^ナま^ナあ^ナる^ナく^ナ一^ナ句^ナ

三^フ帝^ミの^ミ西^シと^ナ切^キぶ^ナして^ナ中^{ナカ}の^ナ七^{ナナ}文^ナ字^ジ中^{ナカ}と^ナ二^ニ版^{バン}又

こ^ノる^ノよ^リの^ノ名^ナみ^テあ^ラぶ^ルも^トる^ル白^ク猿^{ツル}ハ

漢^{トク}師^シの^ノ人^ナの^ノあ^ラい^テあ^らん^ドは^らる

十七 三つあまのふらふら

是^{コノ}を^ナく^ナし^ナけ^ナら^ナむ^ノの^ノ一^ナ句^ナ 貞室

い^くま^まそ^のあ^らう^くく^の電^{デン} 其角

大^{オホ}の^ノか^カ表^{ヒラ}し^テ切^キま^らん^ドと^ナ一^ナ句^ナを^ナ切^キら^る自^ジ問^{モン}

自^ジ答^{トウ}し^テい^ふれ^ば切^キら^る者^{モノ}つ^まい^はれ^ばと^ナい^はる^切ら^る

ん^んま^ま切^キら^ると^ナい^はく^紙上^ノに^シ電^{デン}一^ナ句^ナに^シれ^ば口^クは^ら

十八 室^{ムロ}の^ノ切^キの^ノ事^{コト}

一^{ヒト}句^クの^ノ働^{ハタ}い^はし^ると^ナい^はる^とい^はる^其の^ノ事^{コト}を^ナあ^らわ^せる

座^ザの^ノま^まと^ナい^はる^座の^ノ秋^{アキ}の^ノ心^{ココロ} 座のままの心

三^カ帝^ミは^ナい^はる^三の^ノ名^ナを^ナあ^らわ^せる 中^{ナカ}の^ノ事^{コト}を^ナあ^らわ^せる

大志を古風く切字の多そ 南流に不修
併句作の書用らんこころしむらんあはれ

②切字あはれなるか

たるゆりけく 如斗が かしらか切字

③文字余りの事

文字をわきまなくなうそぬしうふあはれ
併句の書ふとたはふふあはれ
二ころま多うても耳ふこび各別か下
中の方し書んかふこりやあはれか
長不御有

あはれなるものよこひてふ
茶つと道白矢とく川と新
後綴おろしとまはるは留
けりしとまはるは留
大切な法書よし
高流よりいふふり多し
切字の人れんあそやふあはれ
④文致の切字の道理
了地陰陽のりれ河もそん然やそらりり

あはれなるものよこひてふ
茶つと道白矢とく川と新
後綴おろしとまはるは留
けりしとまはるは留
大切な法書よし
高流よりいふふり多し
切字の人れんあそやふあはれ

あはれなるものよこひてふ
茶つと道白矢とく川と新
後綴おろしとまはるは留
けりしとまはるは留
大切な法書よし
高流よりいふふり多し
切字の人れんあそやふあはれ

あはれなるものよこひてふ
茶つと道白矢とく川と新
後綴おろしとまはるは留
けりしとまはるは留
大切な法書よし
高流よりいふふり多し
切字の人れんあそやふあはれ

切字

切字

終るるに能く終るるの如く心 心を
歩むるに能く歩むるの如く心を 全
かくはるるに能くはるるの如く心を 全
歩むるに能く歩むるの如く心を 全
凡そ歩むるに能く歩むるの如く心を 全
又歩むるに能く歩むるの如く心を 全
歩むるに能く歩むるの如く心を 全
歩むるに能く歩むるの如く心を 全
歩むるに能く歩むるの如く心を 全
歩むるに能く歩むるの如く心を 全

歩むるに能く歩むるの如く心を 全

世名所録格

歩むるに能く歩むるの如く心を 全

歩むるに能く歩むるの如く心を 全

世名所録格

歩むるに能く歩むるの如く心を 全

歩むるに能く歩むるの如く心を 全

歩むるに能く歩むるの如く心を 全

世名所録格

歩むるに能く歩むるの如く心を 全

絶世

三十一

曲うさやうと月をばらう

幸侍のおともの歌えは後

曲とそふまゝ一何程とるく強もまゝるハ草紙

世二 せめてる押子

と川をいひめいんて

花のは紙家あうと見ゆ

世三 せがふとて押子

ぞいふ文のふまよふあうと

とのまゝとあふゆらぐとあう

何と

まふかと せんと此教く

花のちと何ぞと何いひて

上と鏡いふやうと何まよま

いふとていふとて

いふとていふとて

世四 下の台とて

せ殿おまらとて

はのくまとてとて

世五 下の台とて

いふとていふとて

上

下

入報の西の隣らも

カクコトクイ
みけ
コカク
ヨリ
ヨリス
ヨリス

其はくしめ

よののしるる上心かろのいよとる

いん心鬼とあつてと

トのるのはまの二つとて又も白

くつを

はくしたんがわ

一日の夜酒をのみは

其下の白ん

いくすつぬふじ

本のからくれ

かのくゆ

このてあ

い

このま

其

えげせでか

上

下

の山

の山

○ 極を越えて極と云ふは

○ 九つあるのこの名

○ 九つ張りのや

○ 九つあるこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

○ 九つあるのこの名

の山

の山

事として似借のせしむるに自ら其の如く
くし海をとおるるに

いとゆるくゆるくおつた 更衣 ともな

とおきえ風をまわくまふ 夏衣

らぬよとぬ掛つととるむれと 長衣

かつくともぬ掛つととるむれと 長衣

えおの白くゆるくおつたを考へてくまふし思ひつら

るゆるくゆるく人より山海を木の花に美

鳥数こそよきとよむとつらふとも夏の海を

万一程の情のむえ又又の情をわのむえを

あつたむえをよむとよむとつらふとも夏の海を

あつたむえをよむとよむとつらふとも夏の海を

あつたむえをよむとよむとつらふとも夏の海を

○ 栗 由代をよむとよむとつらふとも夏の海を

○ 春風 春のむえをよむとよむとつらふとも夏の海を

けみぬゆるとる人より夏衣をよむとよむとつらふとも夏の海を

じししとつらふとよむとつらふとも夏の海を

たたくあつたむえをよむとよむとつらふとも夏の海を

佐保姫 妻の遺化ノ神ナリ
名中ニテ海ナリ

吉野餅祀 坊中ニ尚有テ餅ヲツキ在来、祀ル者ヲモテ
餅ヲツクニ糸指ノ人ニ寄リタヘル

送教経 四十二童経トテ仏ノ送戒ナリ
イ本尺込堂ニアリ

松林明 十カ尺カ堂有ニ夫余ノ松明ヲ立火ヲ放モヘ左所ヲ
チタラスモモハヤウヨリ農人カ之凶ヲ占フ

積塔 光孝天王御子雨夜ノ夢トシハ盲人ニテヨウシケルト云
毎石ヲツク彼多ク返シテ法公盲人友ヲスムト云

貝よせ風 天ニ上座太子ノを冥長カ松波ノ浦見テル
カニニ次ヨセタル貝ヲ云式ニ天子ハ仰ル

継尾鳥 白尾ノ鳥ヨリナリ 妻ハ山ハ海心有モノ松妻
鳥ヲつゝふ時鳥ノキニシラスト云白鳥ニテ

原山ハ海心十カラシニニ為ナリ
鳥ノ尾ヲツグク己カ尾ノ白キヲ雪カト見テ

きくすへ鳥 鳴鳥ト云カク物鳥カク皆雛子ノ物ナリ
宵ニ鳥ノ鳴声ヲ夜未明ニシテ取ライヘリ

かほ鳥 かは鳥ハ金傘ニ只一ツノき鳥トアリ雛子ナリト
云説モアリ定家ハ不知トナリホシ交

寒食 清明ノ節ニ日ヲ云冬ニ至ヨリ百五日ニアタリ火盛ナルヲ忌レ
禁火ト云リ柰粥ト云リ餅ト云リ飯ト云リ用ルヲナリ

安楽花 又ハクハ高土ニ子扱ト云者アリ幸ヨリ石トモ不出山ニ隠レタリ友人
山ヲ焼成不出シテ死タリ幸衣ニ思シ石ハ日中火ヲ焚ス云

初学云 大寺寮ノ学士西坂本ノ寺ニテ法苑抄云
云ニテ竹ヲ賦ス云寺定云

雲ノ入鳥 此鳥ノ名ヲモ云云
法号ノ名ヲモ云

鳥肉 此鳥ノ名ノ
冷ナリ

椀綱 小といナリ
さへ貝ナリ

山

山

箕山崎日女

山崎歌文ノ神人ノ番テアリ略表ハシテ
ハタシテ其ノ役ヲ日ノ長者ト云

松あはれ

山海ハ冬を波アラシ商人ノ及ニ至リ松あはれワタリ
産物ヲ交易シテ秋ニナリぬル

粽

根カ芽カヤノ葉ヲ以テ巻タル故ニ
俗ニテ巻モチト云トナリ

山田田扇

イセ之神友山田植ニ六尺斗ノ大扇ヲ持テ
振見物ニイタカシムル

せり

夏ノ夜麻ヲトル火ナリ
畏ヲトキナリ

氷室

四月朔日ヨリ九月迄一テ秋スルノ六月朔日ヲ
初トスルノ妙ナリハ元日ニ有ナリ

一夜酒

酒ノ字ナリヨリヨリトヨム七月廿日一テ毎日
飲ヨシ今日ツクリテ供ストカヤ

麻地酒

中級ノトク成也酒ノ氣志ツヨキモノノ氣味ニ造ル
極異ノ石斗アリ秋上ニ成之肥存冬ニ有ヨシ

座次涼

方余後小下ホ夜中ニ式アリ太平楽ト云有山王様現ヲ
ほ真有琵琶ヲヒク未明ニ終ル二月後ニ有シ

福の巻花

福又ケテ舞アガルノ遊キ之音合ハリト云候ニ用
心ナリ巻ハヤセタル

さくさく麻

さくさくの村子有ニナリ
農人ノ有ナリ

辻ぐら花

辻ぐら花の中略シタル名ナレトモ赤キ花子ノ
名ニ成タルナリ

秋盃蘭盆

梵僧ナリ密ニ於物ヲ盛テ傍ニ信於ノ心カ
分セガキ杯云リ分ニ祝杯云ハ候ナリ

お村山系

信は必候物ノ多ク山物 徳屋他ル杯云キニテ
神ノ仮屋ヲツクル有持スルモアリ

相撲

七月下旬ノ内裏ニテ有クナリノ節ト云天子
内後スルノ始ヲ石合ト云ハスグリテ石ルヲ扱ト云

こころアト云ハお撲せ人ハ古ノイフ角カハ伝不ニ有テ
ヨノ俗ニシル不ナリ秋ハ社ノ多クモナリナリ

地蔵系

洛中近ニ有石佛ヲ曰俗巧ニ彩色ヲシテ供物酒肴ヲ供行立
ツルナリを其石佛ニ大日モアリ。謀ハ道証ヲ多ク

鷹の山守り終

山鷹ノ秋ニワカルナリ

初冬傳

冬を山ノ鷹ヲ始テツカフク。及ヨリ初ノ又ケタル冬を
ニテ初ノ出括ヒタルヲ冬ノ鷹ノ著ニ火ヲトモシテ

夜トヤヨリ出シ入ヲスルニヨリ
著者トイフハ鷹ノ熱名ナリ

駒途

内裏ハ馬車ナリ救定リアリ
劫丈太夫ノ子司ニ出途テ受取玉フヨシ

牛月駒

佐佐木月トイフヨリ廿三日ニ牛月馬ナリ
ふお竹ノ人ハ廿五日ニカキルト思ヘリきり系ハ十六日

佐佐ノ名石ナリ甲斐ハ十七日 廿一日ハ廿日 上野ハ廿八日
今世ハヤヨリニ足缺セシメ玉フ上古ノ迷信ナリ

新田作

秋ノ冬ヲ深キニ遠化ノ神ナリ
万系ニハ冬ニモトムル事アリ

鴨のねうき

鴨ニシテク
鴨ヲカクモク

河麻

小キ巢ト云説述ナリ
極ノ種多ナリ

野の茶くき

雪中ノ含メ冬ニ木ノ枝莖ナトニ虫ノ卵ヲサシテ
冬ニ立シヤスキ事ヲイフ子ノ人曰ク人氏

添ふ

田ノ水ヲ取タメニ枝川ノ水ヲ板又ハ竹ノ筒ヲ切テ仕カケタル
モノト云山田ト云モモモヲフクノタル

板

麻ヲおとろく板
鴨子トキモノト云

稲茎

茎ヲ煮タル板ニ
ニユル稲ナリ

菊のきせ終

九月ニ菊ノ葉又時終テ菊ノ形ヲ作り枝ニ月タル
一説九月ノ月ニ合セ花ヲ咲センカク多ク終ラキセアタムル氏

野宮

ムカシノ女ヲイセ太神又ノ神又ニ立ル人依テ
林王屋ナク洛西空野ニ板又ヲ立ル是ヲ野ノ宮ト云

今ニ田終アリ其板又ニ定リテ二年ノ八月ニウツリ玉ヒアクル年
八月ニテ終リニシメス是ヲ野ノ宮ト云也
至フテ神院トイセヘ至玉フ月ヲ野ノ宮ト云ノ別ト云
林又ノ忌日ト云七言外ノ七言ト云アリ

上

上

尾越鴨

山ノ尾ヲ越テ
来ルナリ

小曝江鮎

小キ鮎ノ名ヲ
五ノ十氏小ガラシ氏云

冬 網代寺

由奥ヲ返ルル江州田上ニテ九月九日十二月と云ク
寺ノ鐘其余リクわらるる網代木ヲ梅ルル

築瀆

奥ヲトラン乃湖又ハ川ナトニ築瀆ヲ築テ
東を以テハ築瀆トイフヨシ

琴会

芦杯ノ形或ハ朽木ノ穴ニ
越ラテテハニユリ

夜奥引

冬ニ夜山中ニ歎ヲ持トル人
大ヲ引テ以テ人ノ引ナリ

檜

杣山人ノ木ノ初眉ナリ
冬ニ夜是ヲ焼テアタル

小忌夜

大寺ニ去ルル時ノ節去ニ小忌ノ夜上人寂人感ニカケル
山並ノ花ニテ花をヲスリタルモノ

日ウケの糸 日ウケのかつら
心多ホ冠工かへるなり

神敲

十二日夜忌ヨリ四十八夜行ニ入終夜洛外茶毗七所ヲ
地ヲ志仏終ルス神女アリ妻常俗寺中十八家アリ

雪をまき

若ニ風吹テ雨ノ交タル あり若ハ去ク
若ニ風ノ吹ハ去ク付ニ風ノ吹ハ去クト云

札納

社内ヲ納メテ
社社仏園ハ納ルナリ

くら

世ニその如キ祝ヒコトフクノ事ヲ云テ洛中ノ
あくニ来ル女童殺人ナリ

墨見

ちキ墨ニアガリテ足ナリ
来ル舌凶ヲウカフ事アリ

并大松馬

イセニ松ヲ掛テ其毛色ニヨリ
来年ノ松凶ヲ占フ事アリ

四季の和を委く往セバかきりうき長文一及人より
師匠ニ法書を引合て其正一と云行一其去の得り
いっく 龍哥 龍文を墨一して只初公の
あききうと云一志久と云るなり

ぶやうにさぶさこ一ぱいもどろくくとさずふ
 けしあつんくのさあ人に向きてもけらの付方と
 笑つた皆あひの縁したるたれと首思貫ぐ
 むらうと云とつるえと學く叫まはば一まめぐ

(五) 連戦式目変化のみ

連戦のな式目の建治二年徳念る谷こちて
 為相々の作し其後新式と改ると又追加と云
 加ふらして後にも勅授しんまるとははる
 いつことな三百五年入百五年のこつとめらるるの

連戦もめつ百とせよとらるる追へ変化の
 式目とらるる慶長の所争も連戦の式とがうて
 さうらめらるるゆめ連戦のふまきとては
 連戦のゆめ入員とて其仇得とては附り
 流ひとゆめ人の知らるる多く新式あつた
 めらるるゆめのゆめ人のそあつとらるるゆめ
 又都へ入ても終るるゆめとせんゆめとるるゆめ
 ゆめのゆめとゆめかあゆめとるるゆめとるるゆめ
 授とてじくゆめあつたゆめゆめゆめゆめ

ちんぎよつちくめとくまがのさいふく細小帯
 ころにちんぎよつちくめとくまがのさいふく細小帯
 佐うして取まはる河をよむふくまがのさいふく細小帯
 こつ也佐まふよむに二十九の遠まはるか
 遠まはるまはるまはるのさいふく細小帯
 佐まはるまはるまはるのさいふく細小帯
 取まはるまはるまはるのさいふく細小帯
 男女一帯と一帯とまはるまはるのさいふく細小帯
 といふ合とまはるまはるのさいふく細小帯

くつ後の初まはる大徳のころ鬼はまはる鬼味常と
 まはるまはるまはるのさいふく細小帯
 去後の初まはる大徳のころ鬼はまはる鬼味常と
 一巻のんはるまはるのさいふく細小帯
 甚おけらまはるまはるのさいふく細小帯
 ○花とまはるまはるのさいふく細小帯
 月小まはるまはるのさいふく細小帯
 ちんぎよつちくめとくまがのさいふく細小帯

糸とねし神金くはるゝお白ゝ志の種と記し
たといはらるゝ志二句とつらぬくゝは次子白
糸とねしと志二句と指しつらぬくゝは又
むゝとねし男のきまかきとて
是の海と志いふことと志あつゝ一白の
うらゝ男あり女あり考ふゝ此の志の
対方と志あつゝと志

○昔ゝ志の何事ゝ入る神の事もたゝん
深ゝ花の神と志あつゝ

こゝろは只秋のわらゝあつゝかゝも志のれゝ

余の志の子も女神の志

是の志の源とつらぬくゝは志の志
まゝと志あつゝかゝゝ新古の志の志も
志は古式志の志ゝ志の志も志も
志も志の志も志の志も志の志も
○志の志も志の志も志の志も
志の志も志の志も志の志も

世に志をきりて知る人を知る身在に
 志をぬく人を知る人を知る身在に
 古人の金言を釋とてあはぬゆゑを
 あはれむるに似て思ふ初心の覺
 かゝるがごとく古風とて海流の遠き
 かりそめ
 心かくれしとてあはぬゆゑを
 かくる身在に

俳諧近道卷之上終

